

本興寺だより

令和六年

十月

第二六二号

「(仏は)常に此にあつて滅せず 方便力を以ての故に滅不滅ありと現ず」

(法華經如来寿量品第十六)
自民党の総裁選挙も終わり、石破茂氏が新総裁に選ばれました。今後国のかじ取りに私心を離れて頑張つて欲しいものです。

昔、聖徳太子が、六〇四年に**十七条憲法**を草案され、天皇から承認されましたが、その一条に「**和をもつて貴しと為す**」とあるのを聞かれたことがあると思います。この**十七条憲法**は、**国家公務員の服務の基本**を訓されたのみならず、人間の「**処世訓**」として、常に座右の書として読むべき貴重なものなのです。

聖徳太子はこの**十七条憲法**の他に、政治家に対しての**憲法**があり、次いで**神職、僧侶、儒学**を教える人に対しての**憲法**が、それぞれ**十七条ずつ**發布され、これら全部で**八十五条**が「**聖徳太子憲法**」なのです。

このうち政治家が志すべき**憲法**の第一条に「**政(まつりごと)を為す道は、独(ひと)り天の理(ことわり)に止まるべし**」とあります。

政局の任に当たる者は、高い志を持って、**天の意志(人智を越えた神仏の教え)**に叶っているかを絶えず考え、己を空にして、好き嫌いの観念を絶ち、**党利党**

です。宗祖の遺命を継いで、佐渡から北陸道を南下して京都へ布教される途中、当山にも立ち寄られ、当時真言宗であった当山を日蓮宗に改宗され、以後七百三十年、現在に引き継がれています。

宗祖日蓮聖人も日像聖人も、靈格がずば抜けて高い方であります。

法華經に説かれている神仏からの教え、メッセージを肌で感じ、私達にその教えを正しく伝えるべく苦勞されました。

日蓮聖人は、また先の波木井公へのお礼のお手紙の中で次のようにも述べられています。

「この法華經は三途の川にては舟となり、死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈火となり、靈山へ参る橋也」と。

三途の川とはこの世とあの世を分ける境界の川。**死出の山**とは、冥途に旅経つ出発点の山。**冥途**とは、死者の魂の逝く世界。・と言われています。・と単に伝説や伝聞の世界に過ぎないと思っっている人が多いのですが、**仏様は全て事実であり、嘘は一つもないと云われます**。宗祖はそれを見通して云われたのです。

肉体の命はこの世だけです。魂の命は過去・現在・未来も滅しないのです。この世は肉体を借りて魂が向上する修行のために生まれてきているのだと。

だからこそこの世の生き方、心持ちが余計に大事で、その心が死後も続くのだという事です。

仏様は、生き方を改め、反省するために五つの戒(戒め)を説いておられます。その第一に「**不殺生戒**」が

略を越えて、毎日の政治を行うべしと云われます。

千四百年以上前に、国の憲法で人としての生き方、考え方が明記されていることは驚くべきことです。

時代が変遷しても、人のあるべき生き方は不変です。各**十七条憲法**の条文は皆素晴らしい、現在の混沌とした時代こそ、歴史の彼方に埋没しているこの憲法は、人々がそれに触れて学ぶべき大切な「書」なのです。

今月**十月十三日は日蓮聖人の入滅された日**です。長い間、過酷な難を幾度も受けられたことで、身心に衰えが現れ、身延山での生活の後、療養のため常陸の湯に向けて山を下られました。



九月十八日に武蔵の国(東京)の池上宗仲邸に到着された時死期を悟られ、身延山の領主であった波木井公にお礼の手紙をしたためられ、「たとえ何処にて死に候とも九カ年の間心やすく法華經を誦誦し奉り候山なれば、墓をば身延山に建てさせ給え。未來際までも心は身延山に住むべく候。」と遺命されました。

その後諸方から参集した弟子・信徒に最後の講義をされ、本弟子六人を定めて後事を遺囑されています。亡くなられる二日前(十月十一日)に枕元に「**經一丸**(当時十三歳)のちの日像菩薩に帝都(天皇のおられる当時の京都)の開教を遺命されています。そして弘安五(一二八二)年十月十三日の午前八時頃、六十一年のご生涯を閉じられました。

この**日像菩薩が、当山の開山(本興寺を開かれた方)**

あります。むやみに命を殺すなどという事です。人間は「**万物の靈長**」だと云われます。万物の中で最も**靈妙**(人智で計り知れないほど優れていて神秘的な尊さをそなえている)と誰もが思っていますが、一方で、あらゆる生き物の中で、**同族同士で殺し合いをするのは人間だけだ**と言われます。

サバンナに生きる動物を見ても、ライオンがシマウマを襲うなど弱肉強食はあっても**同種の仲間**は殺さず、また弱い動物に対しても、必要な命をつなぐ時だけ狩りをします。

一番心が尊い**靈長**であるはずの人間のみが、最も残酷な戦争や紛争という、同じ人間に対する殺し合いを、昔から現在まで平気で行って絶えません。今のウクライナやパレスチナを見ても分かります。



また「**殺生**」ということは、他人を殺すことに留まりません。**命を縮める、縮めさせることも殺生**なのです。

日々の苦しみや患いで心が病む、他人に迷惑をかける。これらの気持ちや行為が、自分や他人の命を縮める殺生の罪を無意識に作っているのです。だから仏様は第一に殺生の戒めを説かれているのです。

紙に書かれて現存している昔の文書で、日本で一番古いのが、聖徳太子が書かれた**法華經の注釈書(六一四年)**です。何時でも、「**和の尊さ**」を忘れず、**天の理(意志)に合う生き方**が大切なのだと、この經に説かれています。 合掌 本興寺住職 中 谷 聰 秀